

都道府県別賞一等

かけがえのない時間

鹿児島県 薩摩川内市立樋脇中学校 三学年

笹原 瑠夏

「じいちゃん、こんにちは。」

「いらっしやい。また来たのね。」

祖父と交わすいつもの会話。この時はまだ、思いもしなかった。一年後、祖父はこの世にいないなんて。

今から二年前の夏。祖父の胃ガンが発覚した。見つかったのが遅く、ガンは末期の一手手前の第三ステージまで進行していた。抗ガン剤治療を始め、少し効果はあったものの、昨年の一月に末期だと言われ、手術をすることができない体になってしまった。それを知った私たちは、ひどくショックを受けたが、祖父は違った。どんなにつらくても、悲しい現実を突きつけられたとしても、祖父は一度も私たちの前で弱音を吐くことはなかった。末期ガンと宣告されてから半年後。胃ガンが発覚して一年が経った。祖父の姿は、一年前とは見違えるほど細くなってしまったが、中身はそのままだった。祖父に会いに行くと決まって、

「また来たのね。来なくて良かったのに。」

と、私たちに言っていた。これは、あくまでも冗談で、祖父との会話で冗談が入っていない記憶がないというくらい、祖父は冗談を言うのが好きだった。しかし、八月に入ると入院を繰り返すようになり、祖父の体はガンによってどんどん弱っていった。そして、半年の余命宣告を受けた。私は部活が忙しくなり、祖父と会う回数も減ってしまった。祖父と久しぶりに会ったのは、余命宣告を受けてから約一カ月後。その日祖父はたまたま家にいたものの、動くのが精一杯というほど体は衰えていた。しかし、相変わらず冗談で私たちを笑わせてくれた祖父は、昔と全く変わらず、その時間が何よりも楽しかった。『ずっと長生きしてくれればいいなあ。』と、その時心から私は思った。そして、帰る時に

「体育大会、頑張るから見に来てね。」

「うん。見に行くから。」

私も祖父も微笑んで言った。これが、祖父と交わした最後の会話となった。

それから約二週間後のこと。祖父の体に異変が起き、六十九歳という若さで亡くなった。最初は信じられなかった。あんなに元気だった祖父がガンになり、つらい日々を一年半送り、余命宣告を受けてから約一カ月でこの世を去って

第54回中学生作文コンクール

しまうなんて思いもしなかった。半年の余命宣告を受けても、祖父なら生きるだろう、そして、一年後は昔みたいに笑顔で私たちと冗談を言い合っているだろうと信じていたからだ。祖父なら大丈夫、絶対生き延びると希望を持っている自分がいたんだと思う。人はいつ、何が起きるか分からない。突然倒れたり、交通事故にあつたり、祖父のように完治できなくなってしまうたりして悲しい上に、何よりもお金がかかるのが現状だ。以前、祖母もこんなことを言っていた。

「じいちゃんにかかった治療費は何百万円もしたけれど、生命保険に入っていたから多少はかかったものの、そこまで払わずに済んだんだよ。」

これを聞いて、私は改めて保険の大切さを知った。日本の三大死因のうちの一つと言われているガン。今も日本中で苦しんでいる人々や遺族は数多くいるだろう。私も、いまだに祖父の死を受けとめきれしていない。『祖父に会いたい。』『祖父がいたら。』と、あの楽しかった頃をふり返る。今思えば、祖父と交わした何気ない会話や遊びに行った日々の“何気ない時間”がどれだけ大切であったか、当時の私には理解しがたいことだと改めて思う。人は、大切な人を失って初めて、“あたりまえのこと”や“あたりまえの日々”の大切さを知るのだと、今回の体験から分かった。

私は、天国にいる祖父へ誓った。

「絶対、志望校に合格するから。」

この目標を達成するために今日も私は勉強机へ向かう。天国にいる祖父に見守られながら。